



# もど子と人婦

第五卷第七號

小さい別嬪さん

おきな

さてもある國に、一人の大金持  
の商賣人が居ました。子供が三  
人ありましたが、皆女の子で、  
三人とも揃つての容姿よしでし  
たが、とりわけ一番の妹嬢が非

常じょうな美人びじんでした。夫せれで小こさな子供こどもの時じ分ぶんから此こゝ娘むすめのことを人ひとが  
 皆みな小こさい別べつ嬪びんさん「小こさい別べつ嬪びんさん」といいつた位くらゐですが、生お長ちやうくなる  
 につれて、だんくう美うつくしくなりましたから、誰たれも眞まこと實じつのなを呼よぶ  
 者ものがなくつて、矢や張ちやう子こ供どもの時ときの儘ま別べつ嬪びんさんといふ名なで通きつて居ゐま  
 す。夫せれで、二ふた人たりの姉あねさん達たちは、何なんだか嫉あはましくつて耐たらないので  
 した。

妹いもうと娘むすめは今いま申もうした様ように容か姿さが一いち番ばん美うつくしい許ゆるりでなく、氣き立だまでが、  
 姉あねさん達たちよりはずつと美うつくしくつて居ゐます。一いち寸すん話わして見みますと、  
 まづ姉あねさん達たちの方かたは、自じ分ぶん等なちの金かね持もちのことや身し分ぶんのよいことなど  
 を大たい層そう鼻びにかかけて、何い時つも何い時つもお造つくりなど許ゆるりして居ゐます。そ  
 して、それ芝しば居ゐ見けん物ぶつだの、やれ舞ま舞ま踏と會かいだのと、毎まい日じちく出歩ちやういて

居りますすが、妹娘の方は、夫とは反對で、何かしらん家庭の事を  
お手傳したり、閑があれば書物を読んだり、繪を畫いたり、音樂  
の稽古をしたりして居ます。

何に致せ三人とも容姿がよい上に、大層なお金持の娘といふので  
すから、方々からお嫁に欲しいとか、お婿さんになりたいたいとかい  
ふ申込が澤山あるのですが、二人の姉さん達は、私達は通例の人  
などの處へは決してくお嫁には行かない、少くとも伯爵か侯爵  
位の人でなくては嫌だといって居ます。然し妹娘の「別嬪さん」のい  
ふのは、こうです。「私はまだお嫁に行くには早過ぎますから、今  
少しの間はお父さんの所に居たいと思ひます。」  
所が、この一家に取って非常な災難が不意に降って湧きました。

夫は、或時お父さんが商賣で大損をして、悉皆財産を亡した上に  
 澤山な船を難船させて仕舞って、元の家にも居られなくなつたの  
 です。さて、こうなりますと、前には方々から、お嫁にくれとか、  
 お婿さんになりたいとかと、大層もてはやされた二人の姉さん達  
 には、誰も構ってくれる人がなくなりました。「何だ、あんな生意  
 氣な女が」とか、「あんなにお奢侈ばかりする女は仕様がな」とか、  
 さまくくの悪口ばかり云はれて居ます。然し小さい別嬪さんに對  
 しては、誰も彼もお氣の毒だ可愛相だといつて、矢張澤山に貰ひ  
 に来ますが、「別嬪さんは、お父さんが、こんなに、御難儀をなさ  
 れて居るに、自分獨り離れて他へ行くことは嫌だといつて、とう  
 く皆連れ立つて、田舎の小さい家へ引つ込むで仕舞ふことにな

りました。そして、皆で働くことになりましたが、わけて別嬪さんには毎朝四時に起きて、家の拭き掃除から朝飯の用意まで悉皆自分一人で引き受けてやっけて居ります。最初は随分辛いとも苦しいとも思ひましたが、慣れて見れば夫程でもなく、今では結局身體の爲によい運動にもなるといふ風です。そして夫をして仕舞つてからは、御本を讀んだり書を習つたり、音樂の練習をしたり、或時は糸を紡りながら唱歌を歌つたりなどして居ります。夫に二人の姉さん達といへば、毎日うかくと時間を無駄に費して居る許りで、先づ朝飯は、伏床の中で食べる、そしてやつと十時頃になつて起きて来て、夫から大低皆で揃つて畑へ行くのですが、夫でも姉さん達は、直疲勞れたといつては、木の蔭の處へ行つて休ん

で居ります、そうして二人で以て妹娘のことを、やれ意氣地なしだのなんだのと、惡口許り言つて居ます、けれどもお父さんは中々そうは思ひませんで、以前よりも一層妹娘を可愛がつて大事にして居ました。

さて、こんな風で一年許りも暮らして居ました所が、或日のこと、お父さん所へ一通の手紙が着きました。其手紙で見ると、失なつたと許り思つて居たお父さんの船の中でも、一番大きな船が一艘無事に港へ看いたといふことなのです。これを聞いて二人の姉さん達は狂氣の様になつて喜びました。今にすぐこんな汚い田舎の家を捨て、又元の様な立派な暮らしに歸ることが出来やうと思つたからです。夫で二人は、お父さんが其船を見に行くといふの

を聞いて、お歸りには屹度新らしい着物に、帽子に、腕環に、櫛  
 や簪など澤山なお土産を買ってきて下さいと注文して居ます。所  
 が、妹の方は何も申しせん。お父さんは不思議に思つて、  
 別嬪さん、お前、何も要らないの？ お父さん何を買ってきて  
 やらう？

「お父さん、私他に何も要らないんですが、たった一つお願があ  
 るのよ、夫は薔薇なの、ほら、お庭の花壇には何も植はつて居な  
 いのでせう、だから、私彼處に薔薇を植えたいと思ひますの。  
 といつて居ります。

そこで、お父さんは愈々旅立をすることになつて、三人の娘達に  
 別れを告げて家を出ました。そして幾日かかゝつて、港へ着きま

したが、困ったことには、其船の  
 ことに付いて、面倒な裁判沙汰  
 が起つて、いろく氣を揉んで  
 手を盡して見たが、どうも思ふ  
 様に行かなくて、可愛相にと  
 うくお父さんは、元の儘の一  
 文なしで、家に歸ることになり  
 ました。まあ、これも災難だか  
 ら仕方がないと思つて諦らめて、  
 一足も早く家に歸つて、又子供  
 等に遭ふのを楽しみにして、急





いで戻って来ましたか、どうしたもののか、途中で道に迷って仕舞って、幾ら行っても幾ら行っても人の家のある處に出ることが出来ませんで、だんくと山の奥へ奥へと這入り込んで仕舞ひました。

さて困った事になったと思つて居ますと、其中に日は暮れて眞闇になつて来る、おまけに雪交りの雨が降つて来ますし、風も甚く吹いて来て二三度も馬から吹き落された位です。そうして居ます中に、お腹は空いて来ますし、身體は足勞れて来る、夫に、こんな山の中で、ひよとかして狼にでも出遭つては大變だといふ心配もあり、お父さんは、この時、もうどうして宜いか分らない様になりましたが、何の氣なしに、ひよいと向ふを見ますと、ずっと

遠方の眞闇な森の中に、小さな火の光りが、ぴかりと見えました。  
で、俄に元氣づ

いて、一生懸

命に、馬を其

方に進めまし

た所が、こん

な山奥に不思

議にも立派な

御殿があつて、

先の火の光り\*

は、この御門から這入って行って、

案内を頼みました、可笑し



\*は、この御殿の

燈でした。御門

などは素晴らし

い大きなもので

お庭の美しい事

など、とても他

で見た事のない

位。

そこで、お父さん

なことに、こんな大きな立派な御殿に、誰も人が住んで居ない様です。立關の側を見ますと、大きな厩がありましたから、今迄乗って来た馬をそこに繋ぎますと、馬も前から餘程、お腹が空いて居たと見えて、藁だの燕麥だのを、むしやく、むしやくと一生懸命になって食べて居ます。

待っても、待っても人が出て来ませんから、お父さんは待ち勞れて、一人で、どんく上って行って見ましたが、夫でも誰も居りません。仕方がありませんから、又構はずに奥へ行きますと、此處は食堂だと見えて、食卓の上には、立派なお料理やらお酒やらが出て居ますし、夫に火鉢には火が、カンくとおこって居ます。其中に時計が鳴ります、音を數へて見ると、十一時です。斷は

らないで食べるのは不可いかないと思おもひましたが、どうにもお腹なかが空すいて仕方しかたがないから、とうとう其御馳走そのおちそうを頂いたいて、夫それに雨あめや雪ゆきで衣物きものが、びっしよりになつて居ありましたから、火ひの側そばによつて乾かかして居ありました、然しかし、心こころの中うちでは、何なんだか氣味きみが悪わるくつて、ぶる／＼と慄おそえて居あるのであります。然しかし、自分じぶんでも、「こんなに難儀なんぎをして居あるのだから、此處こゝの人が戻もどつても、屹度きつと許ゆるして呉くれるに違ちがない」と思おもつて力ちからをつけて居ありました。

其中そのうちに時計とけいは十二時じふにじになりました。そこで、又次またつぎの部屋へやを開あけて見みますと、其處そこには立派りっぱな寢床ねどを取とつて居あります、この時ときには、もう勞あれて眠ねくつて仕方しかたがないのでしたから、何なにも考かんがへる違ちがもなくなつて、衣服きものを脱ぬいたなり、寢床ねどの中なかに這入はいつて、横よこになつた儘まま、

ぐうぐう眠りこんで仕舞ひました。

さて、翌くる朝になって、眼が醒めた頃はもう十時でした。急いで起きて見ると、寢床の側には、自分の汚ない衣物の外に美しい衣物が一襲揃へて置かれて居ます。

「はあ、して見ると、このお家は、神様のお家かも知れない、己があんまり不仕合せで居るもんだから、お助け下さるんだらう」  
お父さんは、こんなにかんがへて、ひょいと窓の外を眺めますと、昨夜あんなに雪が降ったのに、こゝは丸で春の様で、庭の花壇には、いろいろな花が、今を盛りと咲き亂れて居りました。

夫から、昨夜、食事をした室へ戻って来て見ますと、こゝには、又朝の御飯がちゃんと用意が出来て居ます、

「あゝあ、ありがたいこつた、神様のお蔭で、どんなに助かったか知れない、ぢやあ、この御飯も頂く事にしようかな」

と獨り言をいひながら、お腹に一杯食べまして、さて馬は、どうしたか知らんと思つて、庭の方から廻はつて、厩に行かうとしました、が、其途中で、花壇の中の美しい薔薇の花を見付けて、ひよつと、妹娘のいったことを思ひ出して、

「おう、さうく、別嬪さんは、薔薇の色を土産に持つて來て呉れといつたんだっけ、幸ひ、こゝにこんな美しいのがあるから、これを探つて行つてやらう」

と言ひながら、其中の一番奇麗なのを、一株引き抜きました所が、不意に後の方に、鐘の割れる様な大きな聲がして、

「あの、こゝな恩知らず奴!!」

と奴鳴りながら、のっさくと出て来たものがありました、お父  
さんは、其聲に吃驚して、思はず後を振り返りましたが、其姿を  
見て、一縮になつて慄へ上りました。出て来たものは、一體、何  
でしよう????

(つづく)